麦穂だより

創刊号　2002年3月発行　発行　武蔵野手打ちうどん保存普及会川崎支部
事務局　川崎市麻生区白鳥3－13－3　北條鈴子 ℡044－987－9149

自然とゆとり

この４月から学校が完全５日制に移行される。子ども達の生活にゆとりと潤いを期待してのことである。総合学習もスタートしている。このような社会状勢の変化に伴い、本部には近隣の学校から『手打ちうどん講習会』の要望が殺到し、嬉しい悲鳴をあげていると聞いた。

食べ物は何でもスーパーで手に入ると思い込み、生産や収穫の喜びと縁遠くなってしまった都会の生活。しかしながら地球の有限や温暖化が叫ばれ、２１世紀が『環境』の世紀と言われる中で、景気の減退による影響も受けて自然への回帰と経済優先の慌しい生活からゆとりある生活への転換を望む人が増えている。日曜日の夕方７時からのゴールデンアワーに放映されている『ザ・鉄腕ダッシュ』の中でのダッシュ村が、今日ではめずらしく子どもから高齢者まで多くの視聴者に支持されているのが、その一つの証しであろう。（ダッシュ村は、人気バンドのメンバーによる自然の中での生活体験、米づくりや炭焼き、手打ちうどんなどがテーマとなっている。）

武蔵野手打ちうどん保存普及会
川崎支部長　池田　輝夫

私の住む麻生区でも森林ボランティアへの参加者が増え、炭焼きグループの結成も盛んらしい。自然への回帰である。そして、その延長上に食の問題が連なっている。狂牛病を持ち出すまでのことも無く、安全で安心できる食への回帰が始まっているのである。このような中で川崎支部の会員が既に１００人を突破したのは喜ばしいことであり、又、頼もしいことでもある。

反面、これを維持・発展させる責任も重大なことになってしまった。しかしあまり力まずに自然体でいければと思う。皆で協力して会を盛り上げる。全員がうどんの技術を磨き、うどんを愛し、そして次の世代に伝えていく。

その精進を共に続けられればと願う。

子ども達の笑顔に囲まれて、うどん作りを実習する。そんな日が１日も早く支部に訪れるよう共に頑張ろう。

うどん好き集れ！！のかけ声で
武蔵野手打ちうどん保存普及会
川崎支部発足

昨年 11 月 4 日（ 日）午後 1 時 30 分から、中原市民館にて設立総会を開催。中原区内全町内会連合会長大谷金一様、川崎市教育長松下充孝様他にご出席いただく中で、約 50 名の方々が集いました。

第 1 部　設立総会。本部加藤有次会長にご挨拶をいただき、門井議長を選出、川崎支部会則の制定、支部役員の選出、平成 13 年度事業計画・予算等について議決しました。

第 2 部　発会記念式・記念講演会。北條事務局長の司会進行のもと藤嶋副支部長の開会の辞、山田幹事長の設立総会報告・池田輝夫支部長の挨拶と役員紹介。その後来賓の方々にご挨拶いただき、加藤有次会長に記念講演として『粉食文化論～麺と日本人～』というテーマで約 1 時間 30 分お話いただきました。時のたつのも忘れるほどの熱演に、参会者の気持ちも高まってまいりました。

第 3 部　うどん作り交流。本部の福田指導部長による武蔵野手打ちうどんの作り方を実演していただきました。本来ならその場でゆでて試食する予定が、参加者各自へのお土産となりました。

翌日、2 紙に大きく取り上げられたため、事務局には申込みや問合せが殺到しました。2002 年 2 月 20 日現在の会員数は 100 名です。

川崎支部役員（平成 13 年度）

支部長	池田　輝夫	
副支部長	藤嶋　とみ子	
幹事長	山田　敏徳	
事務局長	北條　秀衛	
会　計	高木　増子，	中島　エツ子
幹　事	澤田　　稔	（指導部長）
〃	江原　光子	（広報部長）
〃	門井　孝一	
監　査	島根　正隆，	大河原　美春
顧　問	大谷　金一，	小机　　實
	舘　　健三	

役員だけに任せることなく、会員相互で得意技を提供し合い、円滑にして着実な運営に向けて、ご協力ください。

2001年(平成13年)11月5日　月曜日　14版　朝日新聞　32

武蔵野伝来の手打ち

伝統のうどん
川崎でも伝承

保存普及会支部が発足　講習会や文化の発掘も

（朝日新聞神奈川版に取り上げられた）

うどん豆百科
～小麦の発見～

今から一万年位前の西アジアは、まだ氷河期が終ったばかりで、当時の人々は、狩をするにも獲物になる動物がいないのでたいそうお腹をすかせていました。

お腹をすかせた人々が目をつけたのは、広い草原に広がるたくさんの雑草でした。その雑草の小さな種を食料に選んだのです。しかし、小さな種をいくら食べてもお腹はいっぱいになりません。

そこで他のものより種が大きく、そしてたくさん実のついている雑草を探し出して、それを好んで食べるようになりました。

それが人間と小麦との出会い。小麦はもともと単なる雑草の一種でしたが、気候の変化と、その実の豊富さから、私たちの大事な食料になっていったのです。

会　員　募　集

うどん好きあつまれ！！

会則（抜粋）に賛同なさって入会希望の方には、会費を添えて事務局にお申込みください。

手打ちうどん保存普及会川崎支部

会則（抜粋）

第１条　本会は武蔵野手打ちうどん保存普及会川崎支部（以下「支部」という）と称し，事務局を川崎市麻生区白鳥３－ 13 －３に置く。

第２条　支部は，武蔵野手打うどんの保存普及に努め，食文化の創造と会員相互の親睦を深め，よって食文化の発展に寄与することを目的とする。

支部は，前条の目的を達成するために次の事業を行う。

（１）手打ちうどん講習会及び試食会の開催

（２）会報の発行

（３）その他，目的達成に必要な事業

第４条　支部は，第２条の目的に賛同する者をもって組織する。

第５条　当支部に加入しようとする者は，会費を添えて加入届を支部長に提出しなければならない。

第７条　支部の会議は，総会，役員会とする。

第９条　支部の会務を分担するために役員を置くものとし，総会において選出する。

第 12 条　役員の任期は２年とする。ただし再任をさまたげない。

第 13 条　支部の会計年度は４月１日に始まり３月 31 日に終る。

第 14 条　支部員は会費として月額 400 円を納めなければならない。

第 15 条　支部の運営経費は会費及びその他の収入をもってあてる。

第 17 条　この会則施行について必要な事項は，役員会が別に定める。

附則　2001 年 11 月４日施行

武蔵野手打ちうどん保存普及会

川崎支部活動報告

2001 年	11 月４日	発会式・設立総会（参加者５０人）
	11 月中旬	タウンニュース・ＦＭかわさき・横浜ウォーカー東京新聞より取材
	11 月 16 日	第１回支部役員会
	11 月 17 日～18 日	麦まき日まち秋の祭り（小平市ふるさと村）参加
	12 月　６日	本部会報「饂飩」原稿依頼，広告依頼
	12 月　８日	第１回支部講習会（約 60 人参加）
	12 月 11 日	支部広報部会（本部会報について）
	12 月 16 日	本部講習会へ参加（３名）
2002 年	１月　９日	ラジオ日本取材
	１月 13 日	本部役員会へ参加〔３名）
	１月 29 日	第２回支部役員会
	２月３日	本部総会（４名参加）
	２月８日	支部広報部会（支部ニュースについて）
	２月 21 日	第３回支部役員会
	２月 24 日	本部・支部　事務局会議

【予　告】

来たる五月十九日（日）午後、川崎支部定期総会を開催しますので、会員の皆様多数のご出席をお願いいたします。

第２回うどん作り講習会のお知らせ

すでにお手元にご案内が届いているかと思いますが、来たる３月 24 日（日）午前９時 30 分～と午後１時 30 分～の２回に分けて、うどん作り講習会を開催いたします。会場は市立高津高等学校食堂です。

なお、その日に本部機関誌「饂飩」第１４号をお配りしますのでご期待ください。

（写真は第１回の講習会の様子）

「麦穂だより」の由来
（あとがきにかえて）

麦の穂をたよりにつかむ別れかな
松尾芭蕉

京浜急行八丁畷駅から、旧東海道を少し東に進むと、俳聖芭蕉の句碑があります。

元録７（1694）年５月、江戸を発って故郷伊賀を経由し、九州までの旅を目指した芭蕉は、六郷川を渡りました。街道並木の外は見渡す限りの青い麦畑で、数名の門人たちと別れを惜しみましたが、再び江戸に戻ることはありませんでした。

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

の辞世の句を残し、その年 10 月不帰の客となったのです。

芭蕉のつかんだ麦の穂は、どのような行末をたどったことでしょう。

うどんと切っても切れない“麦の穂”にちなみ、川崎に残された俳聖にまつわる文化財にあやかり、武蔵野うどん保存普及会通信のタイトルとしました。

創刊号発刊にあたり、本部会長でいらっしゃる、加藤有次川崎市市民ミュージアム館長に揮毫を引き受けていただきました。

支部及び本通信の幸先よい船出となることを願いつつ、皆様のお力でぜひ盛り上げていただきたいと切に願うものです。